

本多弘之

honda hiroyuki

宗教心と根本言

6

ここに「根本言」というのは、阿弥陀如来の名号を一般の名詞や言葉から区別するためである。しかし、仏の名号であるなら、一応は存在するものを名指しする固有名詞としての意義を持つものでもある。その仏すなわち阿弥陀如来とは、『無量寿経』に語り出されている物語の内容、すなわち法蔵菩薩の因位の願心とその成就した報身・報土を包んだ意味を持つ名である。したがって、単に特定の存在の固有名詞としての名ではなく、いわば仏法そのものを名詞として表したものの、動的なはたらきを名詞にした言葉、と言うことが

できよう。つまり、河の「流れ」とか、車の「走り」というような、動く様を名詞にしたものということである。この物語を包んだ名の意味を聞き開いていくことが、「その名号を聞く（聞其名号）」という『無量寿経』の教えによる衆生の宗教的生活となるのである。

法蔵菩薩の願心は、一切の苦悩の衆生を平等に収め取って、必ず成仏させたいという願心である。これを大悲の本弘誓願という。この願心を、親鸞は天親の『浄土論』に照らして、衆生を済度せんがために一心を施与せん

とする願いであり、そのために願心の行として名号を「回向」するのだ、と領解された。それを和讃で次のように詠われる。

如来の作願をたずぬれば

苦悩の有情を捨てずして

回向を首としたまいて

大悲心をば成就せり

（『正像末和讃』）

この和讃に言われている回向は、『無量寿経』の本願成就文に出てくる「至心廻向」の



回向なのだ」と領解されたのである。我ら凡夫がこの回向に値遇すること、それが願生の意欲を持った信心が発起することである。その願生は、「我が国に生まれんと欲え」という如来の悲心から出る命法（これを如来の勅命という）に依憑しているのである。したがって、信心は我ら凡夫に発起するけれども、その因は如来の願力であり、その力が如来回向の名号を方法として選び出したのであり、名号の意味を聞く信は「本願他力」による真心であることを示される。

名号が仏法（如来の大悲が衆生に恵もうとする一如・大涅槃）を表現する言葉であり、その仏法に如実に相応することが「如実の修行」であるとされる。我ら凡夫にいかにしてその「如実修行」が可能となるのであろうか。すなわち、根本言の意味する内実に、我ら凡夫が到り着くなどということがいかにして可能なのか。

この問題に対しても、親鸞は曇鸞の教示によって、「如実修行」という言葉は法蔵菩薩の「永劫修行」によって成り立つのであり、その法蔵の作願たる「回向」によってわれらに発起する真信心こそ、名号に相応する唯一の道なのだ」と気づかされた。

この回向する願心は、大悲心を衆生に信じさせる力となり、信心を発起する作用となる。その場合、願心が衆生の意識上に表れて

きて、具体的事実となる内容を「行・信」と表現する。それを和讃では次のように言う。

弥陀の回向成就して

往相還相ふたつなり

これらの回向によりてこそ

心行ともにえしむなれ

（『高僧和讃（曇鸞和讃）』）

弥陀の悲心が、衆生に成就するときには、大きく「二回向」という表現を通して、「心・行」となると言う。この「二回向」は、曇鸞の「浄土論註」を受けたものである。天親が自己の一心の背景に「五念門」「五功德門」の因果を語っている。曇鸞はその五念門（自利利他の行）の中の利他行の因位である回向門とその利他行の果徳である第五功德門に、それぞれ往相回向・還相回向という語を当てている。それを親鸞は、本願大悲の「苦惱の有情を捨てずして 回向を首としたまいて 大悲心をば成就せり」という回向の「はたらき」なのだ」と受け止めた。

親鸞は「教行信証」「教巻」を「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。」と始めている。そして「行巻」では「謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。」と始め、そ

の「大行は「大悲の願より出でたり。」と押さえ、その願の名を列挙して「諸仏称名」であることを示し、そこに「往相回向の願」という名を出している。さらに、「信巻」では「謹んで往相の回向を案ずるに、大信あり。」と始められる。

このように、仏道たる浄土真宗を成り立たせる作用を、「回向」という言葉に集約する親鸞の意図は、現代生活をする我らにいかなる意味を呼びかけようとするものであるか。我らの大先輩たる曾我量深は、「回向とは表現である」とされた。すなわち、我らには不可思議にして見ることも感ずることもできない大きなはたらきを、示し表し出そうとする形が、教言としての「回向」という言葉に託された意味である、と。見えざる大悲が衆生に呼びかけて止まない意欲を、「回向」する「欲生心」と表現し、衆生の自覚にまで表現するのだ、と。「無量寿経」の浄土への呼びかけが、いわゆる機の三願を通じて、「欲生我国（我が国に生まれんと欲え）」と叫びかける。その「欲生」は、如来の勅命である。それが大悲から衆生への切なる表現なのだ、ということなのである。

（続）

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）